




## 直和分解

ref: 行列と行列式の基礎 p113~114

ref: 長岡亮介 線形代数入門講義 p233~235

ref: テンソル代数と表現論 p6~7

 **直和分解** 線形空間  $V$  の部分集合  $W_1, W_2$  に対して、任意の  $v \in V$  が  $w_1 \in W_1, w_2 \in W_2$  によって


$$v = w_1 + w_2$$

と一意的に表されるとき、 $V$  は  $W_1$  と  $W_2$  の**直和**である（**直和**に分解される）といい、

$$V = W_1 \oplus W_2$$

と書く

この定義は、次のように言い換えることができる

 **直和分解の同値条件** 線形空間  $V$  の部分集合  $W_1, W_2$  に対して  $V = W_1 \oplus W_2$  が成り立つことと、

i.  $V = W_1 + W_2$

ii.  $W_1 \cap W_2 = \{0\}$

の両方が成り立つことは同値である

 証明

(i), (ii)  $\implies V = W_1 \oplus W_2$

$w_1, w'_1 \in W_1, w_2, w'_2 \in W_2$  とする

仮定 (i) と和空間の定義より、

$$\boldsymbol{v} = \boldsymbol{w}_1 + \boldsymbol{w}_2 = \boldsymbol{w}'_1 + \boldsymbol{w}'_2$$

この等式は、移項によって次のように変形できる

$$\boldsymbol{w}_1 - \boldsymbol{w}'_1 = \boldsymbol{w}'_2 - \boldsymbol{w}_2$$

部分空間は和に閉じているため、左辺は  $W_1$  に、右辺は  $W_2$  に属する

よって、このベクトルは  $W_1 \cap W_2$  に属する

仮定 (ii) より、 $W_1 \cap W_2$  の元は零ベクトルであるので、

$$\begin{aligned}\boldsymbol{w}_1 - \boldsymbol{w}'_1 &= \mathbf{0} \\ \boldsymbol{w}'_2 - \boldsymbol{w}_2 &= \mathbf{0}\end{aligned}$$

したがって、

$$\boldsymbol{w}_1 = \boldsymbol{w}'_1, \quad \boldsymbol{w}_2 = \boldsymbol{w}'_2$$

となり、 $\boldsymbol{v}$  の表現の一意性が示された ■

$$\underline{V = W_1 \oplus W_2 \implies (i), (ii)}$$

和空間の定義をふまえると、(i) は直和分解の定義に含まれる

(ii) を示すため、 $\boldsymbol{v} \in W_1 \cap W_2$  とする

$\boldsymbol{v}$  は零ベクトルを用いて、

$$\boldsymbol{v} = \boldsymbol{v} + \mathbf{0} = \mathbf{0} + \boldsymbol{v}$$

と表せるが、直和分解の定義より、 $\boldsymbol{v}$  の表現は一意的であるので、


$$\boldsymbol{v} = \mathbf{0}$$

を得る

よって、 $W_1 \cap W_2 = \{\mathbf{0}\}$  が成り立つ ■

## 直和分解の一意性を表す条件

3 つ以上の部分空間による直和を考えるにあたって、直和分解の定義に含まれていた「一意性」を表す条件を定式化する

 部分空間の和における表現の一意性 和空間  $\sum_{i=1}^k V_i$  の元  $\boldsymbol{v}$  を、部分空間  $V_1, \dots, V_k$  の元  $\boldsymbol{v}_i \in V_i$  の和として

$$\boldsymbol{v} = \sum_{i=1}^k \boldsymbol{v}_i \quad (\boldsymbol{v}_i \in V_i)$$

と書くとする

このとき、次の条件が成り立てば、和に使われる  $\boldsymbol{v}_i$  は  $\boldsymbol{v}$  により一意的に定まる

$$\boldsymbol{v}_1 + \cdots + \boldsymbol{v}_k = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{v}_1 = \cdots = \boldsymbol{v}_k = \mathbf{0}$$

### 証明

仮に、 $\boldsymbol{v}$  が 2 通りの和で表せるとする

$$\boldsymbol{v} = \sum_{i=1}^k \boldsymbol{v}_i = \sum_{i=1}^k \boldsymbol{v}'_i \quad (\boldsymbol{v}_i, \boldsymbol{v}'_i \in V_i)$$

このとき、

$$\sum_{i=1}^k (\boldsymbol{v}_i - \boldsymbol{v}'_i) = \mathbf{0}$$

となるが、ここで  $\boldsymbol{v}_i - \boldsymbol{v}'_i$  は  $V_i$  に属する


そこで、 $\boldsymbol{w}_i = \boldsymbol{v}_i - \boldsymbol{v}'_i \in V_i$  とおき、

$$\boldsymbol{w}_1 + \cdots + \boldsymbol{w}_k = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{w}_1 = \cdots = \boldsymbol{w}_k = \mathbf{0}$$


という条件を満たすとすると、 $\boldsymbol{w}_i = \mathbf{0}$  より、

$$\boldsymbol{v}_i = \boldsymbol{v}'_i \quad (i = 1, \dots, k)$$

が導かれる

したがって、 $\boldsymbol{v}$  の和に使われる  $\boldsymbol{v}_i$  は一意的に定まる 

この一意性の条件を用いて、複数の部分空間による直和を次のように定義する

 **直和** 線形空間  $V$  と、その部分空間  $V_1, \dots, V_k$  が与えられたとき、 $\boldsymbol{v}_i \in V_i$ ,  $\boldsymbol{v} \in \sum_{i=1}^k V_i$  に対して、

$$\boldsymbol{v}_1 + \cdots + \boldsymbol{v}_k = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{v}_1 = \cdots = \boldsymbol{v}_k = \mathbf{0}$$

が成り立つとき、 $\sum_{i=1}^k V_i$  は  $V$  の**直和**であるといい、

$$\bigoplus_{i=1}^k V_i$$

と書く